やれなかった授業　出来なかった授業

令和３年２月27日（土）

山崎正伸

掛け軸を掛けたために板書ができません。時間の制約もありますので、こちらには、板書の代わりに、お話しする資料の他に、画家や先生方のお名前を上げておきます。

Ⅰ、やれなかった授業

一、『伊勢物語』筒井筒の絵

○中村道太郎（なかむらみちたろう）　生没年不明

兄は画家の中村大三郎明治三一年（一八九八）三月二一日―昭和二二年（一九四七）九月一四日没四九歳。

○磯田長秋（いそだちょうしゅう）

明治一三年（一八八〇）五月五日―昭和二二年（一九四七）一〇月二五日没六八歳。師は小堀鞆音。

二、『古今和歌集』の巻第一八・雑下

題しらず　　よみ人しらず

九九四　風ふけばおきつ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ

ある人、この歌は、むかしやまとのくになりける人のむすめにある人すみわたりけり。この女おやもなくなりて家もわるくなりゆくあひだに、このをとこかふちのくにに人をあひしりてか

よひつつかれやうにのみなりゆきけり。さりけれどもつらげなるけしきも見えでかふちへいくごとにをとこの心のごとくにしつついだしやりければ、あやしと思ひてもしなきまにこと心もやあるとうたがひて、月のおもしろかりける夜かふちへいくまねにてせんざいのなかにかくれて見ければ、夜ふくるまでことをかきならしつつうちなげきてこの歌をよみてねにければ、これをききてそれより又ほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへたる

三、『伊勢物語』二三段②

さて、としごろふるほどに、女、おやなくたよりなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、かうちのくに、たかやすのこほりに、いきかよふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしとおもへるけしきもなくて、いだしやりければ、おとこ、こと心ありてかゝるにやあらむと思ひうたがひて、せんざいのなかにかくれゐて、かうちへいぬるかほにて見れば、この女、いとようけさうじて、うちながめて、

風ふけばおきつしらなみたつた山夜はにやきみがひとりこゆらむ

とよみけるをきゝて、かぎりなくかなしと思て、かうちへもいかずなりにけり。

四、『大和物語』一四九段

むかし、やまとのくにかつらぎのこほりにすむおとこ女ありけり。この女かほたちいときよらなり。としごろおもひかはしてすむに、この女いとわろくなりにければ、おもひわづらひて、かぎりなくおもひながらめをまうけてけり。このいまのめはとみたる女になむありける。ことにおもはねど、いけばいみじういたはり、身のさうぞくもいときよらにせさせけり。かくにぎわゝしきところにならひて、きたれば、この女いとわろげにてゐて、かくほかにありけどさらにねたげにもみえずなどあれば、いとあはれとおもひけり。心ちにはかぎりなくねたく心うしとおもふをしのぶるになむありける。とゞまりなむとおもふ夜も、なを「いね」といひければ、わがゝくありきするをねたまで、ことわざするにやあらむ、さるわざせずばうらむることもありなんなど、心のうちにおもひけり。さていでゝいくとみえて、せんざいの中にかくれておとこやくるとみれば、はしにいでゐて、月のいといみじうおもしろきに、かしらかいけづりなどしてをり。夜ふくるまでねず、いといたううちなげきてながめければ、人まつなめりとみるに、つかふ人のまへなりけるにいひける、

かぜふけばおきつしらなみたつたやまよはにや君がひとりこゆらむ

とよみければ、わがうへをおもふなりけりとおもふに、いとかなしうなりぬ。

このいまのめのいゐはたつた山こえていくみちになむありける。かくてなをみをりければ、この女うちなきてふして、かなまりに水をいれてむねになむすへたりける。「あやし、いかにするにかあらむ」とてなをみる。されば、この水あつゆにたぎりぬれば、ゆふてつ。又水をいる。みるにいとかなしくてはしりいでて、「いかなる心ちし給へば、かくはしたまふぞ」といひてかきいだきてなむねにける。かくてほかへもさらにいかでつとゐにけり。かくて月日おほくへておもひけるやう、「つれなきかほなれど、女のおもふことといとみじきことなりけるを、かくいかぬを、いかにおもふらむ」と思ひいでて、ありし女のがりいきたりけり。ひさしくいかざりければ、つゝましくてたてりけり。さてかいまめば、我にはよくてみえしかど、いとあやしきさまなるきぬをきて、おほぐしをつらぐしにさしかけてをりて、てづからいゐもりをりけり、いといみじとおもひて、きにけるまゝに、いかずなりにけり。このおとこはおほぎみなりけり。

五、『万葉集』巻第四の

湯原王歌一首

六七三　月読之（ツキヨミノ）　光二来益（ヒカリニキマセ）　足疾乃（アシヒキノ）　山乎隔而（ヤマヲヘダテテ）　不遠国（トホカラナクニ）

六七〇　つくよみの　ひかりにきませ　あしひきの　やまきへなりて　とほからなくに

六、掛け軸「風吹けば」

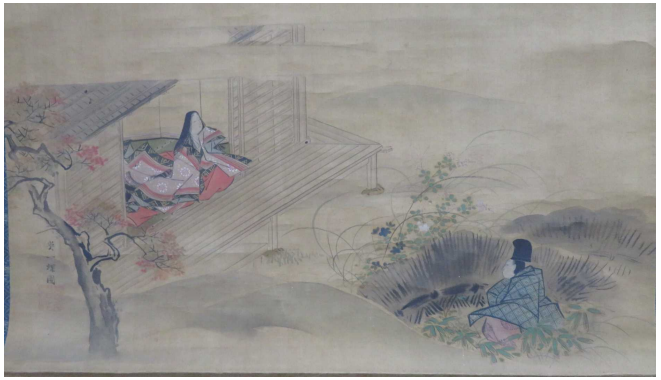
○清原 雪信（きよはら ゆきのぶ）

寛永二〇年（一六四三）―天和二年（一六八二）四月二九日没、三九歳

江戸時代前期に活躍した狩野派の絵師。久隅守景の娘で、狩野探幽は大叔父。

○英 一蝶（はなぶさ いっちょう）

承応元年（一六五二）―享保九年（一七二四）一月一三日没、七二歳。江戸時代中期（元禄期）の画家、芸人。



○在原古玩（ありわらこがん）
文政一二年（一八二九）八月四日―大正一一年（一九二二）八月一二日没、九四歳。
この歌絵は、八四歳の時、大正元年（一九一二）の作品。

○服部 有恒（はっとり ありつね）
明治二三年（一八九〇）一〇月九日―昭和三二年（一九五七）一一月二四日没、六七歳。大正・昭和期の日本画家。

Ⅱ、出来なかった授業

実証ができなくて、山崎の夢がたりになってしまいましたが「朕（われ）はなんと言うことを」という題でお話ししたかったものです。

貴志正造先生
山田清市先生
松野陽一先生

一、鈴鹿三七氏所蔵本、現愛媛大学付属図書館蔵本『大和物語』表紙裏

大和物語

此物かたりはくはさんのゐんの御つくりたまふとなんいふなるていしのみかとゝ申御しゆつけなりてよをひろくめくりたまふてくに・・ところ・・のあはれをもしろしめし又は人のわさのしなのよしあしうさつらさよろつのあはれをもしろしめしけると

昭和五二年（一九七七）一〇月中古文学会和歌文学会合同秋季大会（於太宰府天満宮）

中澤希男先生
佐古純一郎先生
大谷光男先生
雨海博洋先生
浮田章一先生
今井源衛先生　『花山院の生涯』
神作光一先生
金岡照光先生
中村康夫先生

二、寛和二年（九八六）六月廿三日庚申。今暁丑剋許。天皇密々出二禁中一。向二東山華山寺一落飾。于レ時蔵人左少弁藤原道兼奉レ従レ之。先二于天皇一。密奉二剱璽於東宮一。出二宮内一云々。年十九。翌日。招二権僧正尋禅一。剃二御髪一。御僧名入覚。外舅中納言藤原義懐卿。蔵人権左中弁藤原惟成等。相次出家。義懐卿。法名悟真。惟成法名悟妙。皇太子嗣レ祚。（『日本紀略』）

三、出家してしまった花山院の夢を追いたいということ、「朕はなんと言うことを」です。

○『大和物語』に登場する「御」一三章段一〇首

伊勢の御・若狭の御・すけの御・出羽の御・閑院の御・伊予の御・五条の御・少将の御・檜垣の御

女御でも更衣でもないという枠で考えるならば、京極御息所や弁の御息所も含めるでしょう。

○『大和物語』に登場する「僧侶」一二章段一三首　＊恋愛に関わる

二五・二七・二八・三二・四二＊・四三＊・四四＊・五〇・六二＊・一〇五＊・一二二＊・一二三＊

※「零落漂泊する御―『弁の御』と『檜垣の御』―『二松学舎大学論集』六二号、平成三一・三

※『大和物語』に登場する御たち　『二松学舎大学論集』六三号、令和二・三

宇多法皇　延喜七年（九〇七）一〇月　熊野御幸

花山法皇　正暦三年（九九二）　五月　熊野御幸

長保元年（九九九）一一月　熊野御幸中止

宇多法皇　雅明親王　行明親王　藤原褒子　醍醐天皇猶子

花山法皇　清仁親王　昭登親王　平祐之女　祐忠女　冷泉天皇猶子

四、『栄花物語』巻第四「みはてぬゆめ」[二]花山院の所々巡歴

花山院（くわざんゐん）所どころあくがれ歩（あり）かせたまひて、熊野の道に御心地悩ましう思されけるに、海人（あま）の塩やくを御覧じて、

旅の空夜半の煙とのぼりなば海人の藻塩火（もしほび）たくかとや見ん

とのたまはせける。旅のほどにかやうのこと多くいひ集めさせたまへれど、はかばかしき人し御供になかりければ、みな忘れにけり。さて歩き巡めぐらせたまひて、円城寺といふ所におはしまして、桜のいみじうおもしろきを見めぐらせたまひて、ひとりごたせたまひける、

木のもとをすみかとすればおのづから花見る人になりぬべきかな

とぞ。あはれなる御有様も、いみじうかたじけなくなん。

一条の摂政の上は、九の御方ともに東院（ひむがしのゐん）に住ませたまひて、この院をいかで見たてまつらんと思しけれど、ただ今の御有様、さやうに里などに出でさせたまふべうもあらずなん。

山中裕他校注・訳『新編日本古典文学全集』31、小学館、一九九五・八、一八二・一八三頁。

五、『新日本古典文学大系』の脚注

哀傷の部は、死別の歌を集めており、万葉集の挽歌の系譜を引くが、文選・芸文類聚（人部）「哀傷」に学んだ部類であろう。他人（ひと）をいたむ歌群と辞世の歌群とからなる。死者を知る者は哀悼し、遺族を知る者は弔慰する。礼記・曲礼「知レ生者弔。知レ死者傷」この部の「泣く・悲しむ」は漢語「哭」で代表される情念。名義抄「哭　ナク・カナシブ」

「ひとをいたむ　二十八首」（みまかりける時に）十一首、（服喪の時に）六首、（亡き人を思いて）十一首「辞世の歌」六首

六、『後撰和歌集』、巻第二〇　慶賀・哀傷

哀傷歌

あつとしが身まかりにけるをまだきかで、あづまより馬をおくりて

侍りければ　左大臣

一三八六　まだしらぬ人も有りけるあづまぢに我も行きてぞすむべかりける

あにのぶくにて一条にまかりて　太政大臣

一三八七　春の夜の夢のなかにも思ひきや君なきやどをゆきてみんとは

返し

一三八八　やど見ればねてもさめてもこひしくて夢うつつともわかれざりけり

ひとつがひ侍りけるつるのひとつがなくなりにければ、とまれるが

いたくなき侍りければ、雨のふり侍りけるに

一四二三　なくこゑにそひて涙はのぼらねど雲のうへよりあめとふるらん

めのみまかりてのとしのしはすのつごもりの日、ふることいひ侍り

けるに　兼輔朝臣

一四二四　なき人のともにし帰る年ならばくれゆくけふはうれしからまし

返し　つらゆき

一四二五　こふるまに年のくれなばなき人のわかれやいととほくなりなん

七、北村季吟『八代集抄』

よのつねの恋の歌もあり。又恋のうたならで恋の心にかよふをまじへいれられし也

朱雀院、うせさせ給ひけるほどちかくなりて、太皇太后宮のをさな〈天暦六年952 8/ 〉くおはしましけるを見たてまつらせたまひて　御製

一三二三　くれ竹のわが世はことに成りぬともねはたえせずもなかるべきかな　（抄・ナシ）
題しらず　よみ人しらず

一三二四　とりべ山たににけぶりのもえたたばはかなく見えし我としらなん　（抄・雑下・五六九）
やまひして人おほくなくなりし年、なき人を野らやぶなどにおきて侍るを見て　すけきよ

一三二五　みな人のいのちをつゆにたとふるは草むらごとにおけばなりけり　（抄・ナシ）
世のはかなき事をいひてよみ侍りける　したがふ

一三二六　草枕人はたれとかいひおきしつひのすみかはの山とぞ見る　（抄・ナシ）
題しらず　沙弥満誓

一三二七　世の中をなににたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとのしら浪　（抄・雑下・五七六）
忠蓮南山の房のゑに、死人を法師の見侍りてなきたるかたかきたるを見て　源相方朝臣

一三二八　契あればかばねなれどもあひぬるを我をばたれかとはんとすらん　（抄・雑下・五七〇）
題しらず　よみ人しらず

一三二九　山寺の入あひのかねのこゑごとにけふもくれぬときくぞかなしき　（抄・雑下・五七七）
法師にならむとていでける時に、家にかきつけて侍りける　慶滋保胤

一三三〇　うき世をばそむかばけふもそむきなんあすもありとはたのむべき身か　（抄・雑下・五七三）
題しらず　よみ人しらず

一三三一　世の中に牛の車のなかりせば思ひの家をいかでいでまし　（抄・ナシ）
法師にならんとしけるころ、雪のふりければたたうがみにかきおき〈応和元年961 12 05〉て侍りける　藤原高光

一三三二　世の中にふるぞはかなき白雪のかつはきえぬる物としるしる　（抄・雑上・四二九）
服に侍りけるころ、あひしりて侍りける女の、あまになりぬときき　よしのぶ

一三三三　すみぞめの色は我のみと思ひしをうき世をそむく人もあるとか　（抄・ナシ）
返し　よみ人しらず

一三三四　すみぞめの衣と見ればよそながらもろともにきる色にぞ有りける　（抄・ナシ）
成信重家ら出家し侍りけるころ、左大弁行成がもとにいひつかはし〈長保三年1001 2/ 04〉ける　右衛門督公任

一三三五　思ひしる人も有りける世の中をいつをいつとてすぐすなるらん　（抄・ナシ）
少納言藤原統理に年ごろちぎること侍りけるを、志賀にて出家し侍るときき〈長保元年999 3/ 29〉てい　ひつかはしける

一三三六　さざなみやしがのうら風いかばかり心の内の涼しかるらん　（抄・ナシ）
女院御八講捧物にかねしてかめのかたをつくりてよみ侍りける　斎院

一三三七　ごふつくすみたらし河のかめなればのりのうききにあはぬなりけり　（抄・ナシ）
天暦御時、故きさいの宮の御賀せさせたまはむとて侍りけるを、宮〈天暦九年955 1/ 04〉うせ給ひにければ、やがてそのまうけして御諷誦おこなはせ給ひけ

る時　　御製

一三三八　いつしかと君にと思ひしわかなをばのりの道にぞけふはつみつる　（抄・ナシ）

為雅朝臣普門寺にて経供養し侍りて、又の日、これかれもろともに

かへり侍りけるついでに、をのにまかりて侍りけるに、花のおもし　〈長徳元年995/以前〉

ろかりければ　　春宮大夫道綱母

一三三九　たき木こる事は昨日につきにしをいざをののえはここにくたさん　（抄・雑下・五七二）

左大将済時、白河にて説経せさせ侍りけるに　　実方朝臣

一三四〇　けふよりは露のいのちもをしからず蓮のうへのたまとちぎれば　（抄・ナシ）

おこなひし侍りける人の、くるしくおぼえ侍りければ、えおき侍ら

ざりける夜のゆめに、をかしげなるほふしのつきおどろかしてよみ

侍りける

一三四一　あさごとにはらふちりだにあるものをいまいくよとてたゆむなるらん（抄・雑下・五七八）

性空上人のもとに、よみてつかはしける　　雅致女式部

一三四二　暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥に照せ山のはの月　（抄・ナシ）

極楽をねがひてよみ侍りける　　仙慶法師

一三四三　極楽ははるけきほどとききしかどつとめていたるところなりけり　（抄・ナシ）

市門にかきつけて侍りける　　空也上人

一三四四　ひとたびも南無阿弥陀仏といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし　（抄・雑下・五七九）

光明皇后、山階寺にある仏跡にかきつけたまひける

一三四五　みそぢあまりふたつのすがたそなへたるむかしの人のふめるあとぞこれ（抄・ナシ）

大僧正行基よみたまひける

一三四六　法華経をわがえし事はたき木こりなつみ水くみつかへてぞえし　（抄・ナシ）

一三四七　ももくさにやそくさそへてたまひてしちぶさのむくいけふぞわがする（抄・ナシ）

南天竺より東大寺供養にあひに、菩提がなぎさにきつきたりける時、

よめる

一三四八　霊山の釈迦のみまへにちぎりてし真如くちせずあひ見つるかな　（抄・ナシ）

返し　　婆羅門僧正

一三四九　かびらゑにともにちぎりしかひありて文殊のみかほあひ見つるかな　（抄・ナシ）

九、小町谷照彦校注・訳『拾遺和歌集』『新日本古典文学大系』7、岩波書店、一九九〇・一、三九七頁

聖徳太子、高岡山辺道人の家におはしけるに、餓たる人、道のほとり

に臥せり。太子の乗り給へる馬、とゞまりて行かず、鞭を上げて打ち

給へど、後へ退きてとゞまる。太子すなはち馬より下りて、餓ゑたる

人のもとに歩み進み給ひて、紫の上の御衣を脱ぎて、餓人の上に覆ひ

給ふ。歌を詠みて、のたまはく

一三五〇　しなてるや片岡山に飯に飢へて　臥せる旅人あはれ親なし　（抄・ナシ）

になれ・・けめや、さす竹のきねはやなき、飯に餓へて、臥せる

旅人あはれ・・といふ歌也

餓人頭をもたげて、御返しを奉る

一三五一　いかるがや富緒河の絶えばこそ我が大君の御名を忘れめ　（抄・ナシ）

○奥村泉嶺　不明

鴉絵　長井一禾（ながいいっか）明治二年（一九六九）―昭和一五年（一九四〇）没、七一歳。

『東洋画題綜覧』第二冊

片岡山は大和国北葛城郡にある、今の王寺村、志都美村、上牧村等の地をいふ、万葉集第七巻に

片岡の此の向峰に椎蒔かば今年の夏の陰になみむか

とある、聖徳太子ここに行啓在して飢ゑたるものに衣裳を脱与へ給ふ事跡を画く。『日本書紀推古紀』に曰く

廿一年冬十一月、掖上池、畝傍池、和珥池を作る、又難波より京に至るまで大道を置く、十二月庚午朔、皇太子片岡に遊行ます時に飢ゑたる者道の垂に臥せり、仍りて姓名を問ひたまふ、而して言さず、皇太子視て飲食を与へたまふ、即ち衣裳を脱ぎて飢者に覆ひて言く、安く臥せよ、則ち歌よみて曰く。

しな照る、片岡山に、飯に飢て、臥せるその旅人あはれ、親無しに、なれなりけめや、さす竹の、君はやなき、飯に飢て臥せる、その旅人あはれ

辛未、皇太子、使を遣はして飢者を視しむ、使者還り来て曰く、飢者既に死りぬ、爰に皇太子大に之を悲しみ、則ち因りて以て当処に葬埋めしむ、墓固封む、数日の後、皇太子近習者を召して、謂つて曰く、先の日道に臥せる飢者は、其れ凡人に非じ、必らず真人ならむ、使を遣して視しめたまふ、是に於て使者還り来て曰く、墓所に到りて視れば封埋めるところ動かず、乃ち開きて屍骨を見れば、既に空しくなりたり、唯衣物畳みて棺の上に置けり、是に於て皇太子復た使者を返し、其の衣を取らしめ、常の如く且た服たまふ、時の人大に畏しみて曰く、聖の聖を知ること、其れ実なる哉、逾惶まる。

此の片岡山の事跡を書いたものに左の作がある。

橋本関雪筆　『片岡山のほとり』　第五回文展出品

織田観潮筆　『片岡山』　第二回帝展出品

荒井寛方筆　『同』　前期美術院出品

（金井紫雲『東洋画題綜覧』第二冊　芸艸堂（うんさうどう）、昭和一六・六、一五八・九頁）